

第 58 回 青山学院大学英文学会大会

プログラム

日時：2025 年 12 月 13 日（土）10：15 ～ 20：00

会場：青山学院大学 青山キャンパス

青山学院大学英文学会

青山キャンパス構内図



会場

大会本部	17号館 5階	17512 教室
大会受付	17号館 5階	17511 教室前
講演者控室	17号館 5階	17506 教室
研究発表者控室	17号館 5階	17503 教室

タイムテーブル

新任者講演（13:40）よりオンライン配信開始

<u>時間</u>	<u>プログラム</u>	<u>会場</u>
10:15～10:25	開会式	17511 教室
10:30～11:10	研究発表 米文学	17507 教室
	英文学	17508 教室
11:15～11:55	研究発表 米文学	17507 教室
	英語学	17508 教室
12:00～12:40	研究発表 米文学	17507 教室
	英語学	17508 教室
12:40～13:40	休憩	
13:40～14:40	新任者講演 (John Pazdziora 准教授)	17511 教室
14:50～15:50	新任者講演 (長沼 君主 教授)	17511 教室
16:00～17:30	退任者講演 (田中 深雪 教授)	17511 教室
17:30～17:50	懇親会会場に移動	
18:00～20:00	懇親会	アイビーホール 2 階 グリーンエリア A 室

プログラム

開会式 10:15～10:25 17 号館 5 階 17511 教室
 開会の辞： 西本 あづさ 教授（英文学会会長）

研究発表 10:30～12:40 第 1 室：17 号館 5 階 17507 教室

【発表 1】米文学

10:30～11:10

アドバイザー： 齊藤 弘平 准教授

Mary A. Knighton 教授

司会： 松坂 朱莉（博士後期課程 2 年）

発表： 遠藤 日葵（博士前期課程 1 年）

題目： “Wanted to be Discovered and Named”: Karla Cornejo Villavicencio の *Catalina* における doubleness

【発表2】米文学

11:15～11:55

アドバイザー：来馬 哲平 准教授

結城 正美 教授

司会：松坂 朱莉（博士後期課程2年）

発表：加地 愛香（博士前期課程1年）

題目：Lorine Niedecker の“My Life by Water”にみる場所の感覚

【発表3】米文学

12:00～12:40

アドバイザー：結城 正美 教授

来馬 哲平 准教授

司会：松坂 朱莉（博士後期課程2年）

発表：小林 真里那（博士前期課程2年）

題目：Ernest Thompson Seton の前期作品群における「まなざし」について

第2室：17号館5階17508教室

【発表1】英文学

10:30～11:10

アドバイザー：松井 優子 教授

田中 裕介 教授

司会：松木 ほのか（博士後期課程3年）

発表：外川 萌（博士前期課程2年）

題目：Jane Austen の *Sense and Sensibility* におけるコンダクトブックと感情の表象

【発表2】英語学

11:15～11:55

アドバイザー：中村 光宏 教授

横谷 輝男 教授

司会：松木 ほのか（博士後期課程3年）

発表：吉岡 波菜（博士前期課程2年）

題目：イギリス英語の地域アクセントにおける母音間/t/: 音声コーパスに基づく研究

【発表3】英語学

12:00～12:40

アドバイザー：葛西 宏信 教授

Colin J. Thompson 准教授

司会：松木 ほのか（博士後期課程3年）

発表：今井 俊吾（博士後期課程1年）

シェクラー トーマス（博士後期課程1年）

題目：On case assignment in German *außer* ‘except’ phrases

12:40～13:40 休憩

新任者講演

17号館5階17511教室

13:40～14:40

題目：‘I began to see Hell pretty clear’: Robert Louis Stevenson’s Childhood Reading in Christianity

講師：John Pazdziora 准教授

司会：田中 裕介 教授

14:50～15:50

題目：自己効力と自律性を高める言語学習における評価の在り方

講師：長沼 君主 教授

司会：飯田 敦史 教授

退任者講演

17号館5階17511教室

16:00～17:30

題目：江戸の異文化通訳者たち — オランダ通詞の役割とその再評価

講師：田中 深雪 教授

司会：稲生 衣代 教授

懇親会

18:00～20:00 アイビーホール2階 グリーンエリア A室

‘I began to see Hell pretty clear’: Robert Louis Stevenson’s Childhood Reading in Christianity

講師： John Pazdziora（本学文学部准教授）

司会： 田中 裕介（本学文学部教授）

Robert Louis Stevenson (1850–1894) was, by his own admission, an earnestly pious child, anxious to earn God’s favour and gain assurance of salvation. This lecture will consider Stevenson’s childhood reading in Christianity in order to trace the earliest formation of his complex theological imagination. In his unfinished autobiography, he recalls experiencing ‘high strung religious ecstasies and terrors’, fuelled by the ‘religious biographies on which my mind was fed’ (*Memoirs* 63). Texts such as *Memoir and Remains of The Rev. Robert Murray M’Cheyne* (1844) and Maria Louisa Charlesworth’s *Ministering Children* (1855) enforced an ethic of self-emptying devotion and service to God while exaggerating sensitivity to impropriety and fear of damnation. Stevenson’s own earliest writing was ‘The History of Moses’, which he dictated to his mother when he was just five years old. A work as remarkable for its existence as its content, the manuscript and its accompanying illustrations by the young author provide an intriguing glimpse of Stevenson as a child, suggesting how he thought language and narrative should express faith.

自己効力と自律性を高める言語学習における評価の在り方

講師： 長沼 君主（本学文学部教授）

司会： 飯田 敦史（本学文学部教授）

評価は誰のものでしょうか。評価を出す教師のものでしょうか。それとも評価を受ける学習者のものでしょうか。教師中心の授業から学習者中心の授業へと授業の在り方も変わってきていますが、同時に評価も「学習志向評価 (learning-oriented assessment)」の考え方が広まりつつあります。それでは言語学習へのフィードバックを考えた際、100 点を取ったことは何を意味するのでしょうか。70 点であったらどうでしょう。2001 年に「ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR)」が登場して以来、評価の共通の「ものさし (scale)」として、言語を用いて「何ができるか (Can-Do)」を示す能力記述文が注目され、日本の英語教育や日本語教育でも活用されています。CEFR では、学習者自律性に重きを置き、行動志向アプローチのもとで、「社会的行為者 (social agent)」としての学習者・使用者の役割が重視されています。CEFR の理念を参照し、自己効力（できる感）と自律性を高めるための評価の在り方について一緒に考えたいと思います。

江戸の異文化通訳者たち — オランダ通詞の役割と その再評価

講師： 田中 深雪（本学文学部教授）

司会： 稲生 衣代（本学文学部教授）

江戸時代（1603-1868）、オランダ通詞（*Oranda-tsūji*）は単なる翻訳者や通訳者の枠にとどまらず、日蘭間の文化的理解を媒介する存在でもあった。彼らの職務は言語の仲介に加え、日蘭貿易交渉や紛争の解決、商館運営の支援など多岐にわたり、両国間の交流基盤を支えていた。しかし、その顕著な貢献にもかかわらず、オランダ通詞に対しては、語学力不足への批判や「単なる仲介者」とする見方によって、歴史的評価において過小視されることが多い。本研究は、このような従来の評価を再考し、通詞の歴史的・社会的背景を踏まえつつ、その言語的・文化的仲介の実態を明らかにすることを目的とする。具体的には、通詞がどのように日本人とオランダ人の間に立ち、相互理解や知識伝達を可能にしたのかを検討する。その上で、彼らの活動を文化交流の文脈に位置づけ直し、江戸期における数少ない西洋人との国際的接触のあり方を再評価したい。

アドバイザー： 齊藤 弘平 准教授

Mary A. Knighton 教授

司会： 松坂 朱莉（博士後期課程2年）

“Wanted to be Discovered and Named”:

Karla Cornejo Villavicencio の *Catalina* における doubleness

遠藤 日葵（博士前期課程1年）

本発表では、Karla Cornejo Villavicencio による最新作 *Catalina* の二重性について考察する。この作品はアメリカにおける the undocumented immigrant である主人公 Catalina のハーバード大学での学生生活を描く。彼女はエクアドルで生まれアメリカに長く身を置きながらも、どちらにも完全に帰属することができない。その生活の中で、法的身分があるという一点を除いて彼女と境遇が一致する Delphine などといった学友たちとの出会いを通して、DREAM 法案も含めた当時の移民政策の動向とも呼応しつつ、エリート大学に在籍する自分と社会から受け入れられない自分という二重意識に揺れる。さらに、祖父母の期待に応えようと奮闘する自分がいる一方で、その姿を冷笑する自分も存在するという内面における二重性も映し出されている。本発表ではこうした多角的な二重性を W.E.B. Du Bois の double consciousness も参照しつつ、現代における the undocumented immigrants の複雑化したアイデンティティ、さらにはその二重性がどう戦略として評価できるかについて考察する。

アドバイザー： 来馬 哲平 准教授

結城 正美 教授

司会： 松坂 朱莉（博士後期課程 2 年）

Lorine Niedecker の“My Life by Water”にみる

場所の感覚

加地 愛香 （博士前期課程 1 年）

20 世紀アメリカ詩人である Lorine Niedecker は、ウィスコンシン州ブラックホーク島の湿地に住んでいた。彼女は、人間のコミュニティからは物理的に離れていた一方で、季節ごとに様相を変える水辺で、動植物、すなわちノンヒューマンとのコミュニティの中で過ごしていた。*North Central* に所収されている“My Life by Water”(1968)は、まさにその湿地でのモアザンヒューマンの世界とその中で詩作を行う彼女の暮らしを描いた自叙伝的作品である。

今回の発表では、“My Life by Water”を、主に Aldo Leopold の「土地倫理」の理論を参照し、分析する。その際に、Niedecker と親交のあった Louis Zukofsky らオブジェクティヴィスト詩人との手紙のやりとりや、“My Life by Water”が松尾芭蕉の俳句に影響を受けていることなども踏まえながら分析することで、Niedecker が築いてきた様々なコミュニティにも着目したい。以上のような観点から、“My Life by Water”を考察することにより、Niedecker の場所の感覚について理解を試みる。

アドバイザー： 結城 正美 教授

来馬 哲平 准教授

司会： 松坂 朱莉（博士後期課程 2 年）

Ernest Thompson Seton の前期作品群における

「まなざし」について

小林 真里那（博士前期課程 2 年）

北米で活躍した動物物語作家 Ernest Thompson Seton は、“we and the beasts are kin”であると標榜し、脱西洋中心主義・脱人間中心主義的な視点から、動物への共感と野生動物の保護の必要性を描き続けた。ベストセラー作家となったが、時の大統領であった Theodore Roosevelt をも巻き込み肥大化した nature fakers controversy という文学論争において、Seton の動物物語は「非科学的」のレッテルを貼られてしまう。死後もその印象は拭い去りがたく、近年になっても Seton はやや批判的な視点から評価されている。

本発表は、まず、Seton の著作がいかにして「非科学的」で「時代遅れ」と評価されるようになったかを確認し、それらの評価を踏まえた上で、エコクリティシズムの観点から Seton の作品を読み解き、再評価しようとする試みである。controversy 以前に出版された *Wild Animals I Have Known* (1898)、*The Trail of the Sandhill Stag* (1899)、*Lives of the Hunted* (1901) を対象に、作中における動物・人間のまなざしのやり取りが、最も読者の sympathy に訴えかける表現としてどのように高められ、“we and the beasts are kin”という主張として結実したかを検証する。

アドバイザー： 松井 優子 教授

田中 裕介 教授

司会： 松木 ほのか（博士後期課程 3 年）

Jane Austen の *Sense and Sensibility* における

コンダクトブックと感情の表象

外川 萌（博士前期課程 2 年）

Jane Austen (1775-1817) の *Sense and Sensibility* (1811) は、18 世紀にイギリスで流行した感受性の風潮を背景に描かれた作品である。主人公であるダッシュウッド姉妹の性格は、それぞれの恋愛や他方の恋愛を通じて、個々の内面に潜む感情を表現する点に表れる。これまでの研究では、姉エリナーを理性の人、妹マリアンを感情の人と分類し二項対立的な解釈が多く示唆されてきたほか、当時の結婚制度やそれに伴う財産の問題に焦点を当てた分析も行われてきた。本発表では、こうした先行研究を踏まえつつ、マリアンがエリナーの隠された失恋を知った際に見せる感情表現に着目する。この場面を 18 世紀半ば頃から広く読まれていたコンダクトブックに描かれる理想の女性像との関連から読み解くことで、オースティンが示した女性の感情表現の複雑さを明らかにする。そして二項対立という単純な枠組みに収まらない女性心理を分析することで、当時の文化的側面に即した作品論の再考を試みる。

アドバイザー： 中村 光宏 教授

横谷 輝男 教授

司会： 松木 ほのか（博士後期課程 3 年）

イギリス英語の地域アクセントにおける母音間/t/： 音声コーパスに基づく研究

吉岡 波菜（博士前期課程 2 年）

本研究の目的は、イギリス英語の地域アクセントにおける母音間/t/について、多様な音声実現を明らかにし、その出現傾向を言語学的・社会的要因の観点から考察することである。先行研究（Alderton, 2022; Lindsey, 2019）は、/t/の自由変異に対し社会的要因の影響を示唆しているが、言語学的要因と統合的に説明する方法は十分に提示されていない（Zsiga, 2013）。本研究では、International Dialects of English Archive（IDEA）に収録された、さまざまな地域アクセント話者による朗読音声（*Comma Gets A Cure*）を分析対象とし、年齢や性別などの話者情報と合わせて、音響的特徴と聴覚判断に基づく分析を行なった。各異音の出現傾向についての分析では、言語学的要因に加え、年齢や性別などの社会的要因を検討する。分析の結果、母音間/t/には 8 種の異音があり、その出現傾向には地域や話者属性が影響することが分かった。発音変異の理解において、言語学的要因と社会的要因を総合的に捉えることの重要性を示し、今後の課題を検討する。

アドバイザー： 葛西 宏信 教授

Colin J. Thompson 准教授

司会： 松木 ほのか（博士後期課程 3 年）

On case assignment in German *außer* ‘except’ phrases

今井 俊吾（博士後期課程 1 年）・シェクラー トーマス（博士後期課程 1 年）

In this study, we explore case assignment within German *außer* ‘except’ phrases. Like English *except*, *außer* permits both complex (i.e. multiple and PP) and simple complements. In many contexts, simple complements can be marked either with the default dative case or the same case as its antecedent – what we refer to as “parallel case” (1). At first glance, one might assume this distinction boils down to whether *außer*’s structure is underlyingly clausal or phrasal (cf. Jarvis 2022 i.a.). However, upon closer inspection, such an assumption fails to account for the observed distribution. For instance, some positions that permit clausal *außer* (e.g. with multiple remnants (2a)) do not permit parallel case (2b). Additionally, in some positions, there appears to be a contrast between nominative and accusative in the availability of parallel case (3). Building on these observations, the present study examines the structure of German *außer* and considers how case assignment takes place

- (1) a. *er hat alle zu seiner Geburtstagsfeier eingeladen außer { ✓mir / ✓mich }*
 he has everyone.ACC to his birthday party invited except 1SG.DAT 1SG.ACC
 ‘he invited everyone to his birthday party except for me.’
- b. *alle haben sich darüber gewundert außer { ✓mir / ✓ich }*
 everyone.NOM have REFL about that wondered except 1SG.DAT 1SG.NOM
 ‘everyone was surprised by that except for me.’
- (2) a. *außer der Hans mit der Maria hat jeder mit jedem getanzt*
 except the H. with the M. has everyone with everyone danced
 ‘everyone danced with everyone except Hans with Maria.’
- b. *außer { ✓ihm / *er } ist gestern jeder gekommen*
 except 3SG.M.DAT 3SG.M.NOM is yesterday everyone.NOM come
 ‘yesterday, everyone came except him.’
- (3) a. *gestern hat außer { ✓ihr / *sie } nur der Hans Alkohol getrunken*
 yesterday has except 3SG.F.DAT 3SG.F.NOM only the.NOM H. alcohol drunk
 ‘except for her, only Hans drank alcohol yesterday.’
- b. *ich hab außer { ✓ihr / ?sie } nur den Hans gefragt*
 I have except 3SG.F.DAT 3SG.F.ACC only the.ACC H. asked
 ‘except for her, I’ve only asked Hans.’

2025 年 12 月 20 日開催（予告）

学生対象企画

青山パフォーマンス・フェスティバル

学部生による英語発表会

公開リハーサル 12 月 17 日(水) 15:00～17:00

17 号館 6 階 17610 教室

12 月 18 日(木) 17:00～19:00

17 号館 6 階 17610 教室

英語発表会 12 月 20 日(土) 11:00～15:00

17 号館 6 階 17610 教室

本学科生が文学作品の群読（readers theatre）、およびオリジナル英語劇を発表します。本学の教授陣による講評もあります。スピーチ・コンテストの様な順位付けはしません。サークル活動など、学生の自主的な活動とも異なります。英語による自己表現に関する理論背景を学ぶ好機になります。英語による朗読発表、およびプレゼンテーションを批評する視点を養います。

様々な英語発表を見学し、アドバイザーや発表者と意見交換することで問題意識を高め、更なる英語力の向上を目指します。司会進行と発表は全て英語で行ないます。

どなたでも自由に参観できますので、積極的に参加して下さい。

アドバイザー： Andrew Reimann（本学文学部 教授）
Colin J. Thompson（本学文学部 准教授）

司会： 大川 道代（本学文学部 准教授）